

「第3次生物多様性国家戦略」(環境省, 2009)

多様な主体がそれぞれの特徴を活かしながら、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する役割を果たしていくことが期待される

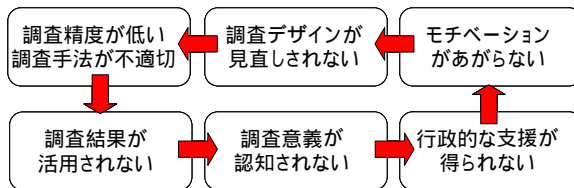
NPOなど市民団体による市民調査へ大きな期待が寄せられている

<宮内(2003), 三上(2005), 鷲谷(2007)など多数>

Stage : 自然科学的な情報収集/ 関係性に着目した人文社会科学的な情報収集

Stage : 市民の意識啓発の場づくり

Stage : 市民の環境施策への参加促進



Stage への進化を妨げる負のスパイラル

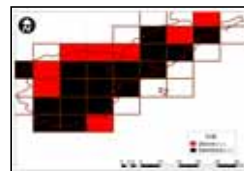
対策(案) ~ 2つのアプローチ ~

アプローチ : 調査デザインの見直し

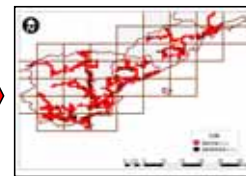


高精度の位置情報
調査実施日時情報
調査ルート情報の取得

ハンディGPSの携行

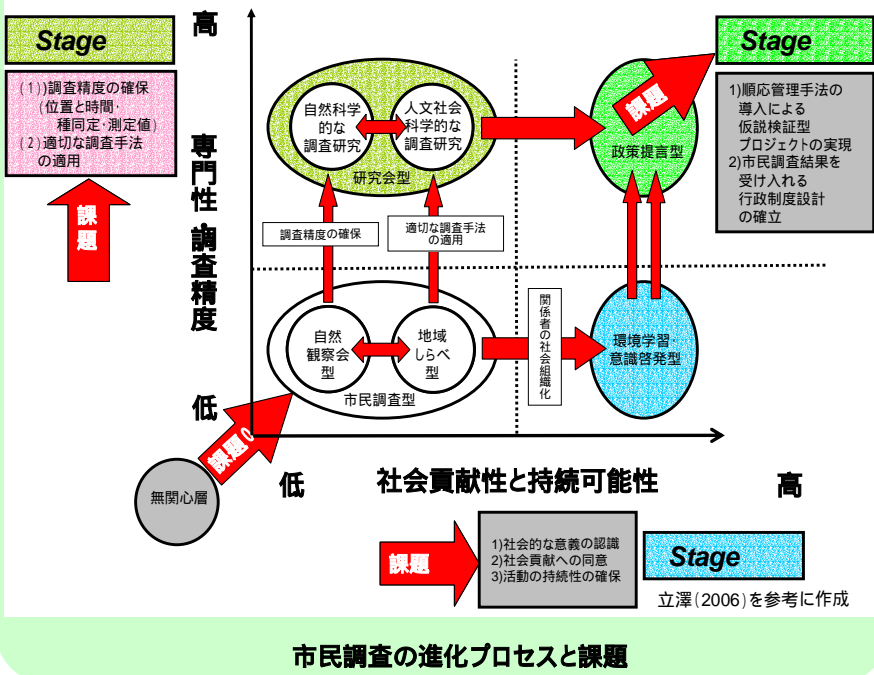


5kmメッシュ解析イメージ



0.5kmメッシュ解析イメージ

アプローチ : 市民調査スタッフのフォローアップ
(1)事前協議 と (2)鳥獣害マイスター制度の導入



市民調査の進化プロセスと課題

1. 調査地・調査概要(2009年7~10月)



調査地: 徳島県海部郡

アプローチ : 調査デザインの見直し

- ・地元猟友会員20名に協力依頼(専用調査グッズ配布)
- ・ハンディGPSの携行 + 受け持ち範囲の踏査(5時間/2週間以上)
- ・周辺環境, 被害実態をデジカメで撮影 + 調査を隊員手帳に記載

アプローチ (1)事前協議

- ・調査結果の活用方針の説明
- ・調査が可能な調査項目の抽出
被害動物(サル, イノシシ, シカ, 他)
被害農作物種, 定性的被害程度



調査手法説明会

(2) 鳥獣害マイスター制度の導入

- 任務の明確化: 担当地区の明確化 + 個別フォローアップ
- 結果の提示 : 2週間毎の調査結果(出力図)の提示と課題の共有
- 評価 : 成果に対して鳥獣害マイスターとして謝礼支払い

2. 調査結果

調査は適切に実施されたか?

- ・調査メッシュ: 4281メッシュ
- 203メッシュ/人・平地部・農地の大半を網羅
- ・被害報告数: 288(有効率 94.1%)
- 「吉野川流域一斉水質調査: 2000~2008年」の有効率71.6%(田川, 2009)に比べ高い



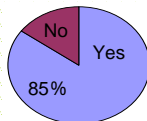
市民調査のメリットのひとつ~コスト削減は実現できたか?~

データ整備工程	データ整備(300ポイントの整備)		情報収集(4,000メッシュ整備)	
	本調査手法	通常手法	本調査手法	民間コンサルタント会社
基礎GISデータの整備	15,000	15,000	計画・準備と事前協議	132,000
属性データの入力	8,000	8,000	謝礼	300,000
調査地点位置入力素図の整備	16,000	40,000	フォローアップ・個別指導	132,000
調査地点位置図の整備	-	85,000	GPSレンタル費ほか雑費	100,000
			調査委託費一式	1,800,000
合計	39,000	148,000	合計	664,000
				1,845,000

進化を妨げる負のスパイラルから脱出する兆しはあるか?

Q1: 次年度の協力? (20人)

Q2: 調査を通じて感想(5人のリーダー)



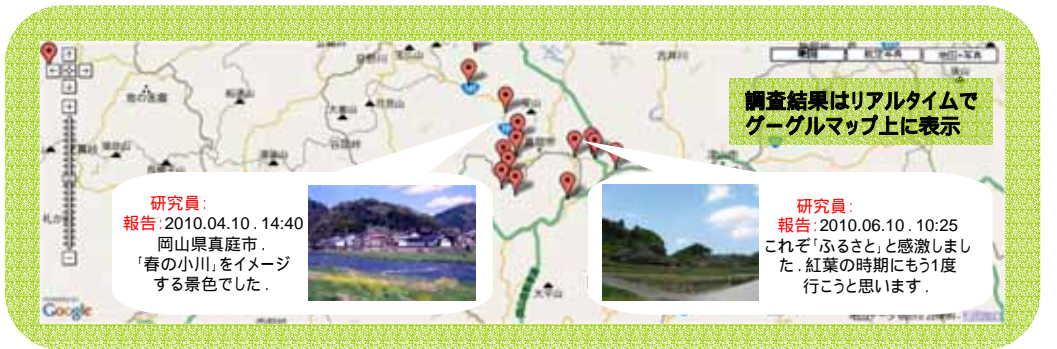
- ・被害が広域に及んでいることを再確認(5人)
- ・地区の住民との会話が aumentado(5人)
- ・電柵以外にすべきことがたくさんある(4人)
- ・年間通じた調査が必要(2人)

アプローチにより、高精度の鳥獣被害地点の位置・日時情報、調査ルート情報が収集可能な調査が低コストで実施でき、進化を妨げる負のスパイラルから脱出する兆しがみられた。課題として、「鳥獣被害の未報告率の検証」、「情報の収集・整備プロセスの簡略化」があげられる。



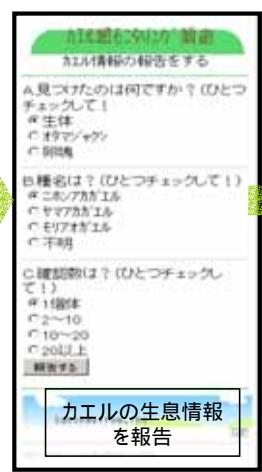
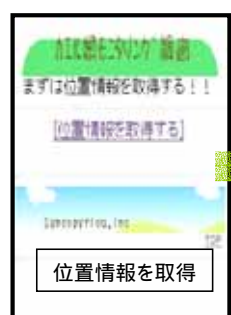
地域の自然に無関心な市民を対象とし、「調査」を意識させないで地域の自然を診るまなざしを呼び起こすことを目的としたツール。

投稿数を地域エコマネーに換算する、写真人気度ランキングを発表するなどのゲーム性を持たせることも考えられる。



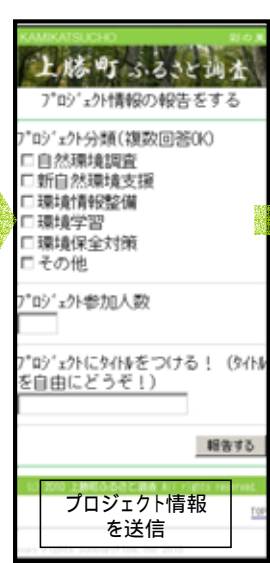
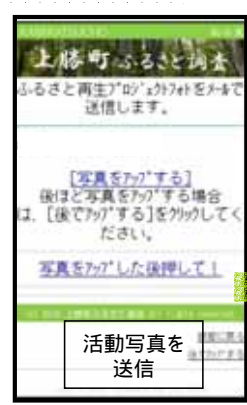
調査員の負担を最小化しつつ環境情報、生物情報の収集・効率的なデータ整備を実現するツール。

指標とする生物、測定・観察項目とする環境情報の選定は管理者が地域ごと・参加者ごとに選定する。



環境保全に関わる活動情報の公開・共有・評価を実現するツール。

投稿数や参加人数の評価を通じ、活動団体・個人にインセンティブを与えることで活動参加へのモチベーションの確保を実現する。



- ・三上直之(2005)環境社会学における参加型調査の可能性 三番瀬「評価ワークショップ」の事例から、環境社会学研究11, 117-132.
- ・宮内泰介(2003)市民調査という可能性 調査の主体と方法を組み直す, 社会学評論53(4), 556-578
- ・須田真一(2007)市民参加の昆虫モニタリング; 『自然再生のための生物多様性モニタリング』 鷲谷いづみ・鬼頭秀一編, 東京大学出版会, 東京, 158-172.
- ・田川良(2009)流域基盤図としての流程区分図の作成および活用手法の提案, 徳島大学卒業論文
- ・立澤史郎(2006)政策提言型市民調査はなぜ失敗したか? ~野生生物保全分野の経験から~, 環境社会学研究12, 33-47.
- ・鷲谷いづみ(2007)自然再生時代の生物多様性とモニタリング; 『自然再生のための生物多様性モニタリング』 鷲谷いづみ・鬼頭秀一編, 東京大学出版会, 東京, 3-11.